

長泉町「ちいきでつながるはじめての日本語教室」R6 年度報告

～「にっち長泉」スタートアップ活用から町の独自運営へ～

西村久美子 静岡県駿東郡長泉町日本語教室(コーディネーター)

1. 長泉町「ちいきでつながるはじめての日本語教室」概要

① 立ち上げからの経緯:

日本語教室空白地域であった長泉町は、町の総合計画に基づき、多文化共生社会実現をめざして、令和4年度よりスタートアッププログラムを活用。令和4年度のサポーター養成講座実施を経て、令和5年度は試行的に対話交流型日本語教室を6回実施。3年目の令和6年度は9回の教室を実施、令和7年度からは町独自の運営に移行する予定。

② R6 年度体制:

- ・長泉町 行政課地域協働チーム 3名(課長、主担当=町のコーディネーター、担当者)
- ・(教室)コーディネーター1名 =西村久美子、指導者2名、指導者補助2名
- ・サポーター 登録 40名 各回 15~20名程度の参加
- ・学習者:申込者 37名 参加者 第1回~第9回までに のべ106名参加
※小学生2名 中学生2名を含む。フィリピン、ベトナム、アメリカ、中国、インドネシア、韓国、タイ、スウェーデン、シンガポール、ミャンマー

2. 今年度の課題とその解決のための取り組み

- ① <課題> 目指す方向をみんなで共有する :背景:昨年度町の担当者、コーディネーター、指導者、支援者、学習者の役割意識が明確ではなく、教室が目指す方向うまく共有できていなかった。

課題解決のための取り組み(1) ~サポーター養成講座におけるスタッフ間の意識共有~

<考えたこと> ○課題の共有→解決方法の共有→意見を出し合いながらの実践(PDCA)

<行ったこと> ○教室愛称決め ○養成講座での方針・役割説明 ○課題共有 ○前年度先輩サポーターから ○コンセプト「またきたい えがおでつながる みんなのホーム」を決めて教室に掲示 ○ふりかえりとアンケートでサポーターの声をひろう

<コーディネーターとして> ○養成講座の計画と実施に関わる ○「みんなでつくる町の教室」であるというムードづくり ○関係者間をつなぐ ○意見をひきだす

◇所感:当初不安はあったものの、運営スタッフ間には意識共有が順調に進み、良いチームづくりができた。また、昨年度から継続参加してくださっているサポーターから「去年の問題を解決しようという気持ちが伝わってきた」と言ってもらった。ただ、サポーターの皆さんとの意識共有には課題が残っていると思う。今後「町がどういう目的で開いている教室か」の意識共有をサポーターに伝えていく努力を継続的に繰り返し行うとともに、スキルアップにも取り組む必要がある。

課題解決のための取り組み(2) ~教室オリエンテーションにおける学習者との意識共有~

<考えたこと> ○学習者に「対話交流型教室」を知ってもらい、ミスマッチを防ぐ。

<行った事> ○オリエンテーションを実施:教室の目的や教室スケジュールを共有

<コーディネーターとして> ○母語支援者を依頼 ○サポーターと学習者との関係づくり

◇所感:楽しそうな雰囲気作りはできたが、意識共有につながったかどうかは不安も残る。アンケートに「この方法がいい」「日本人と話がたかさんできた」と書いてくれたり、教室後のインタビューに生き生きと答えてくれたりしたが、地域の方々との、どの程度関係づくりができたのかは、うまくはかれなかった。

- ② ＜課題＞ゼロ～A1レベル学習者に継続して参加してもらえようにする：背景：令和 5 年度の教室に登録学習者は 30 名であったが、最後まで残ったのは、A2 以上の数名の学習者で、「本当に初期日本語支援が必要な外国人住民に支援がとどいていないのでは」という反省があった。

課題解決のための取り組み(1) ～参加しやすい日程を調査してスケジュール決め～

＜行ったこと＞ 日程は町役場の担当コーディネーターが行ってくれ、すでに決まっていた。

◇所感：参加希望者が多かった日曜日を選んだので申込者は多かったが、継続参加者は数名。だが、1 回の参加者は平均 10 名ほどで、賑わいもあったと思う。LINE やメールで欠席の連絡確認もある程度できるようになった。仕事や用事で欠席した人が多い。今年度は 2 週間に 1 回の実施であったが、毎週にしたら習慣になって参加できるのか、新年度計画の際に検討したい。

課題解決のための取り組み(2) ～対話交流のトピックで流れをつくるスケジュール決め～

＜考えたこと＞ 昨年度のトピックは、教材の目次順で選んだが、今年度は「行動体験活動」を軸に、関連したトピックを配置し、プログラム全体を楽しんでもらえるようにする。

＜行ったこと＞ ○全体に流れができるようにトピックを選んで計画した。

＜コーディネーターとして＞ ○初参加の指導者、指導者補助からも意見が出るように意識。

◇所感：プログラムの流れはうまくいったので、来年度もこの考え方で深めたい。行動体験活動も、より、地域密着を意識した内容にすることで、多文化共生という目的にあった教室になると考える。

課題解決のための取り組み(3) ～学習者のレベル判定・参加者決め・グループ分け～

＜考えたこと＞ 昨年度は、自己評価によるレベル判定を実施したが、役に立たなかった。別の方法で「教室に来てほしい A1 程度の学習者」をしっかり把握したほうがいい。

＜行ったこと＞ ○ スタッフが「とよた日本語レベル判定」の研修を受け、初回に口頭による「聞く・話す」のレベル判定を実施。その結果、対象者は 10 名と判定された。○ グループわけの工夫。母語支援者や、サポートがうまいサポーターが入るように配慮。静岡県の教材のほかに、補助的な教材も用意。

○ 学習者 LINE グループによる参加確認

＜コーディネーターとして＞ ○ 研修とレベル判定練習の提案・実施 ○ ゼロ・A1 レベル学習者が継続できるように運営しようという意識をスタッフやサポーターに共有。○ LINE グループでの案内

◇所感：口頭によるレベル判定は時間がかかったが、対面で話すことにより得られる学習者の情報は多く、グループを考える際も、判定結果を参考にすることができたためやってよかった。また、サポーターに結果共有することで、レベルにあった対応をしてもらいやすかった。最後の回にもレベルチェックをする予定だったが、対象者が欠席だったため実施できなかった。次年度はぜひ実施したい。

3. まとめとして

○今年度の教室活動ふりかえり等：学習者とサポーターを対象にアンケート調査実施。1 月 19 日(日)最後の教室後、サポーターとスタッフ、学習者代表、アドバイザーの方々とて、報告会(感想座談会、学習者インタビュー動画視聴、総評等)を実施し、教室実践の評価を行った。※1/30 静岡新聞に掲載 ○2月3日(月)には、長泉町町長、副町長、総務部長に、アドバイザーの先生方とともに成果報告会を行った。当初参加者がいるのか不安だったそうだが、多くの町民の参加を喜んでいただいた。

○新年度へ向けて：R6年度の最も大きな収穫は、意識共有できるスタッフチームができたことであった。R7 年度は運営スタッフが全員継続する。すでに、今年度の反省会兼新年度へ向けたアイデア出しを開始している。R7 年度はより長泉町に必要な教室の在り方を模索し、年度の早い時期から教室が開催できるように進めていきたいと考えている。

以上